



あ 小学校一年生の 国語の力と教師の願い

高橋 武昌

一、一年生と入門期の国語

(一)子どもの生活を保障する意識的な言語活動を

四十八歳のベテラン女性教師、三十歳を出たばかりの子育て真最中の女性教師、そして私の三人が一年生を担当することになった。

四月末の学年の打ち合わせ会で、次のような話が一人の先生から出された。

「藤村くんがね、今日絵を書いているとき、私のところに来てね、『先生、ぼくのあたまのなかみ、みんな

つかったのでからっぽになったよ』というんです。それで私が『藤村くん、それはたいへんだね。じゃあ、どうしたら、またあたまのなかみ、いっぱいになるかな』ときくと、『ちょっと遊んでくればいい』というんです。彼に、『じゃあ、ちょっと体育館へいっておいで』というところニコニコして行って、十五分もすると元気に帰ってきたんです。」

私たちは、大笑いをしながらも、子どもの学校における生活をどう保障し人間的な成長を促すか話はずんだ。藤村くんのように自分の考えを素直に表現し、それをまた教師がしっかりと受けとめ、本人に考えさせ、子どもが次の行動を自覚的に始めるステップに立

たせる助言の大切さを話しあった。また、このように
はなかなか育てにくい学校生活のテンポの速さ、教育
内容の多さを痛感せざるを得なかった。私たち三人の
担任は、藤村くんに代表される一〇五名の子どもたち
が直面する困難な状況をどう克服していくか、意識的
に努力してきたつもりである。その努力の中心は、言
語を通して育てる面においてであった。

(二) 学年の方針と一年間だしつづけた学年通信

三人の担任は四月始め次の六点をかがけ学年の方針
とした。

- ①教育は科学である。かけがえない子ども達の全
面的発達を促す具体的指導を
- ②教材研究を他の仕事より優先させ共同ですすめよ
う
- ③三人の担任が学年の調和と協力を——そして、そ
れぞれが個性あふれる実践を
- ④親・地域の人にお互い尊敬する気持ちをもってあた
り、大人として共に育ちあおう
- ⑤学年・学級だよりをむりせず出していこう
- ⑥学年PTAなども風通しのよいものにしていこう
以上である。学年だよりで全父母に伝え意見も求め
た。学年で話しあい学習しあってきた基本は右の方針

の中にもあるように、教育は科学であると改めたいい
なおしているところがまず大切だと思っている。「発
達と学習は、学習を指導する教育課程が発達を促進す
るという関係に立っている」(勝田守一「能力と発達と
学習」国土社)という教育課程そのもののあり方を科
学の視点でとらえなおすことが今日ほど求められてい
る時はない。新指導要領の問題点はぬきさしならない
ものだが、教育課程編成の主体者は、担任である教師
であり、そのところを集团的に保障しあいながら、
次の編成の視点を確認してきた。

⑦うそ、非科学的、発達段階の無視を警戒する。逆
に科学と人類の歴史に根ざす

⑧子どもが豊かな主権者にふさわしい教養と人格を身
につける教材を

⑨地域住民・父母が願っている課題をとらえていく
(南中野山小では、とくに出会いと別れの教育を……
とか)

⑩平和・人権・環境問題をきちんと位置づける

⑪どんな時代をものりこえる基礎的・基本的学力を憲
法・教育基本法にのっとってつける等である。

大変大げさな言い方だがやっぱりこうなっていくの
である。

国語教育の実践は、いつも右の内容と深くかわら

せてきたと思っている。入門期の文字指導も、一年間通して作文教育を貫ぬいてきたのも、毎日絵本を教室で読んであげたことも、教科書の読み方教材の分析もアからオまでを意識してやってきたことである。また、それを、教職員全員に共通化をはかるためにも、父母と共に育てあうためにも、学年通信「ほうれんそう」を一年間休まず出しつづけてきた。一年生の子どもと担任が考えたこと・したことは、この学年通信を通してその日のうちに校長先生から調理員さんまでわかる状況になっている。

(三) 子どもの遊びや文化と国語

一年生の教室や家庭を含めた生活の中で学校で始めた遊びや文化が広まったり根をはることが多く、遊び文化と個人のかかわり、集団のかかわりが多様な回路として生まれている。かるたづくり、まりやけん玉やかぞえきれない遊びの普及。各クラスで子どもたちには、年に二百冊以上の絵本に出合うようにしている。勿論家での読みきかせも五〇%以上はやっている。これらは豊かな言語活動を生みだしていると共に、成長の原動力になっている事実も沢山発見している。こんな例もある。

ある日、教室の紙糊の紙を勝手にいっぱい持っていっ

た子があった。教室のあちこちに、「○○さんは △くんをねつあいしています。それをきのう ××が もくげきしました。」なんていう内容のものがおちていた。

私は、おもしろい、よしねつあいを彼らの頭の真中にしっかり根づかせようと考え、その時の授業はことばあそびに変更した。

「ねえ、ねつあい……っていいことばだなあ。裕介くんはお母さんを熱愛。真生子さんのお父さんは真生子さんを熱愛しています…。」

こんないいことばってそうないぞ。きょうは、この大事な「愛」でことばをつくらうね。」といって、一例を黒板に書いた。

「きのう、亮司くんと康隆くんが教室でたたきあいをしていました。だから たたくにあいをつけて たたきあいだ」。

たたきあい、ひっかきあい、あいさつ、とりあい、はなしあい、あいす、しりあい、あいあい、ころしあい、つかみあい、あいすコーヒー、おみあい、なぐりあい、あいず、はなしあい、たべあい、あいすりんく、あいろん、わたしあい、あいすらんど……黒板がいっぱいになった。

裕介くんは、ころしあいを氣にくわないというので

こくばんけしで消したし、克明くんは、「先生、おしりとおしりをつけると、しりあいになるんだね。」と
 いて男の子とおしりをつけあっていた。教室中は大
 さわぎ。数日おしりをつける遊びが見られた。
 こうして一年間ふり返ると、ずい分多くことばあそ
 びをやってきた。ことばと人格の統一を生みだしてい
 るともいえる。

二、入門期の文字指導から

三人の担任の文字指導の計画は次のようになっている。

⑦音節・単語・文を意識させ練習させる

- ・単語で文を組み立てる・話すれんしゅう
- ・写生スケッチ・口頭作文づくり
- ・単語を音節に分解する

⑧運筆練習と位置関係

⑨直音 45文字

- ・「知っている子の鼻をへしおる」
- ・実物教育・単語さがし・文づくり（つくしから教える）

・粘土をつかって筆順と形・プリント

⑩五十音図

- ・行と段・迷子さがし・あいうえおのうた

⑪濁音

- ・忍者が石をなげると変身
- ・にこった音と清音の比較

⑫助詞（くっつき）

- ・が、を、に、へ、て、と、から、まで、は。

⑬よみの練習 教科書を中心に

⑭促音（つままる音）

⑮長音（ながい音）

あいうえおの段 え段お段の例外

⑯拗音（ねじれた音）拗長音

⑰自由な日記 絵↓絵と文↓文

以上のような計画ですすめてきた。教科書の扱いでは、『にいがたの教育情報（22号）』での片岡弘先生の分析を参考にして利用している。

子ども達は、濁点をつけることも大体知っているようだが、ここでは、二十五文字の濁音の文字を正確にしかも五十音図に位置づけて教えることにしている。



からす



がらす

「南中野山城にね、からすにばけた忍者が忍びこみました。城の中でみつけれられ、鉄砲でうたれようとしています。あぶない!」と思った忍者は、二つの石をパッ

とからすめがけて投げました。からすは忍者によってサツと変身。がらすにばけてしまいました」

とお話ししながら、二つの石で全然ちがう音の文字に変わることを印象深くとらえられるようにする。点の書き方も[㊦]でなく確かに石を投げ変身するためには[㊦]というようにかの点とはちがうようにつける必要があることを体験的に教えている。過去には、粘土を実さいに大きい字になげつけさせて授業をしたこともあった。先川くんが自分の名前をプリントに「ぎがば やずだ」とつけてふざけていたので、それを利用してみんなの名前に濁点をつけて遊ぶことも楽しかった。

谷川俊太郎の「ことばあそびうた」の「ばか」はなかった。ばかはなかった。たかかった。やまどみちおの「ちがいくらべ」はらすすべすべでばらとげとげ はちぶんぶんではちべんべん……などの詩をよんでやったり書かせたりして濁点の定着をはかった。ヴィゴツキーの発達の理論に支えられた「おとなの組織的な援助と学習集団の相互刺激のもとで科学的思考の基礎を高次の模倣をしながら学習する」(勝田守一・前掲書)という教育論を、改めて一年生にあてはめてみると、やはり、正しい日本語としての文字指導の体系を教師自身が把握をし、子ども達の知的興味を刺激しながら子ども同士の交流の中で拡大していくことの大切

さを痛感させられる。さらに、日本のすぐれたことばと感性にみがかれた詩を子ども達に用意し子どものことばを浄化させることが大切である。その意味では、現教科書の作文・詩は平たんであり、時には難解であったり、生活のにおいに欠けていたりするものが意外に多い。

光村こくこ「ともだち」下の「しのひろば」はその典型である。日本書籍の「わたしたちのしょうがくこくこ」のそれらと比較してみると顕著である。

教育課程の作成にあたっては、教材の趣旨・目的を理解した上で、子どもの発達課題を捉えながら再編成していくことこそ大切であり、それは学習指導要領をのりこえ実践的批判をしていくことになるわけで、私たちは日々、三人でこうした仕事をしてきたといささかの自負をしている。

三、作文指導を教育の柱にすえて

日に日に発達していくことを願う子どもたちの、現実についての認識活動と、文章表現の活動が統一してすすめられるようにと思ひ進めてきた。始めは次の二つのことを実践している。ひとつは、口頭作文である。口頭詩といってよいかもしれない。

「あのね みきちゃんたらね わたしが たださ
ステージの上に のっただけなのにさ ダメってい
うんだよ」

「あれは きっとぼくのおかあさんだよ
ぼく いのちかけてもいいよ」

「かさはらじゅんのうち しまっているか

(しらない) じゃあ かさはらゆうこってこしってい
るか (しらない) じゅんのねえちゃんだぞ 三ねん
せいなんだぞ」

私たちは、毎日子どもを帰すと、「あー忙しかったね
きょうも」といいながら、子どものおしゃべりを出し
あい記録していった。

もうひとつは、子どもに無罪の白ノートを持たせ先
生に伝えたいことを絵でかせた。生活をみる目を毎
日みんなの前で紹介し、ほめ、はげましていった。

こんな絵がほとんど毎日続く子もいる。

しかし、その変化について、ほめたり、教師が小学



校一年生のころのことを語ってあげたり、他の子の生
活ぶりや物の見方を沢山紹介していく。こどもは多く

の刺激を得て変化を示していく。なによりも教師との
交流が基本にあつてのことである。この絵に文が出て
きたり、次に文だけの日記がでてくる。それを、ほぼ
毎日、学年通信「ほうれんそう」にのせ広めている。
一年生も後半になると、自発的表現から、系統的表現
を意図的に指導していく。

「ある日あるとき生き生きと遊んだことを、時間が
すぎる形でくわしく書く」というテーマで十月に三
クラスで実践した。展開の過去形表現を一年生なりに
定着させることを主にねらつてのことだ。ひとまとま
りの作文を書く前に、時間がすぎるように書くことを
次のように練習することになった。

若い先生がケークを箱に入れて教室にもちこみパフォー
マンスをして、そこまでを書かせるようにしてみた。
校内の研修会でこの授業を見てもらうことになった。
事前の研修会で討論になったことは、時間的経過に従っ
て書きつづることに初めて気づいたこと、食べものを
学校で扱うことの是非(とくに管理職が気にした)、
教師が子どもの作文をあまり読んでいないこと、赤ペ
ンの効果等沢山の課題が生れて楽しい研修となった。
勿論研究授業では生き生きと子どもが反応し、所期の
目標に達した文を書きつづった。とくに作文では、教
科書の例文にとどまらず、指導段階と場面にふさわし

い例文を、日々の日記帳から、作文集からどんなにつけだしていく作業が必要で、学年の有意義な教材研究となった。実践の記録は省略させていただく。

四、よみ方教育を豊かにすすめる

もはや古典的になったといっているほどの教材「おきなかぶ」は、毎回楽しい授業展開ができる。しかし、光村図書の「おきなかぶ」は当然ながら、「かぶをおじいさんがひっぱっておじいさんを おばあさんがひっぱって……」とかぶから人間、動物への目のひろがりがある。しかし、日本書籍の「おきなかぶ」は、かつて光村図書でも扱っていた佐藤忠良の絵と文である。「おばあさんがおじいさんをひっぱって おじいさんがかぶをひっぱって うんとこしょどっこいしょ」それでもかぶはぬけません。」と一点集中型になり子どもの意欲は高まっている。「おじいさんはかぶをひっぱって かぶは石をひっぱって 石はみみずをひっぱって……うんとこしょ どっこいしょ。」という子どもはいなくなつたし、ロッカーのかばんをひっぱるとき劇化をやり、何人かであうんとこしょとやる子が少なくなつたことは、作品そのものの質ともかわっているように最近おもっている。

又、光村図書の一年生の教科書で扱う説明文「ものなまえ」「じどう車くらべ」などは、子どもがよるこび、観点と比較を読みすすめる時の視点として教えるのにかつこうの教材であった。「じどう車くらべ」で「きゅうきゅう車は、けが人や きゅうびょう人をびょういんへはこぶ じどう車です」の読みでは、他の車との比較、この自動車の持つ価値意識をどう扱うか考えてみた。私が「中庭で友だちが投げた石がぶつかって血がでました。そう大変。この人はけが人？きゅうびょう人？」という子どもは「けが人だよ。」という。そこで私は「じゃあ、きゅうきゅう車ではこぶこともあるね」と、こんなゲームもどきの質問とやりとりをして、「じゃあね、きみたちね、男の子が女の子を好きになり胸がキューンといったくなったんだ。女の子は男の子が好きになり胸がキューンといったくなったの。じゃあ、これは、けが人かな、びょう人かな？」と問いかけると子どもは本気で考えはじめた。「やっぱり病人じゃないの。」「いや病人とはいわないのでは。」「先生、それむねやけのことだと思えます。」等々出て大笑いした。紙面が尽きてしまったが、教職員集団のあり方、学校体制のあり方、子ども観や授業観を考えなおすことは、すべて授業から始まっていく。

(たかはし たけまさ 新潟・南中野山小学校)